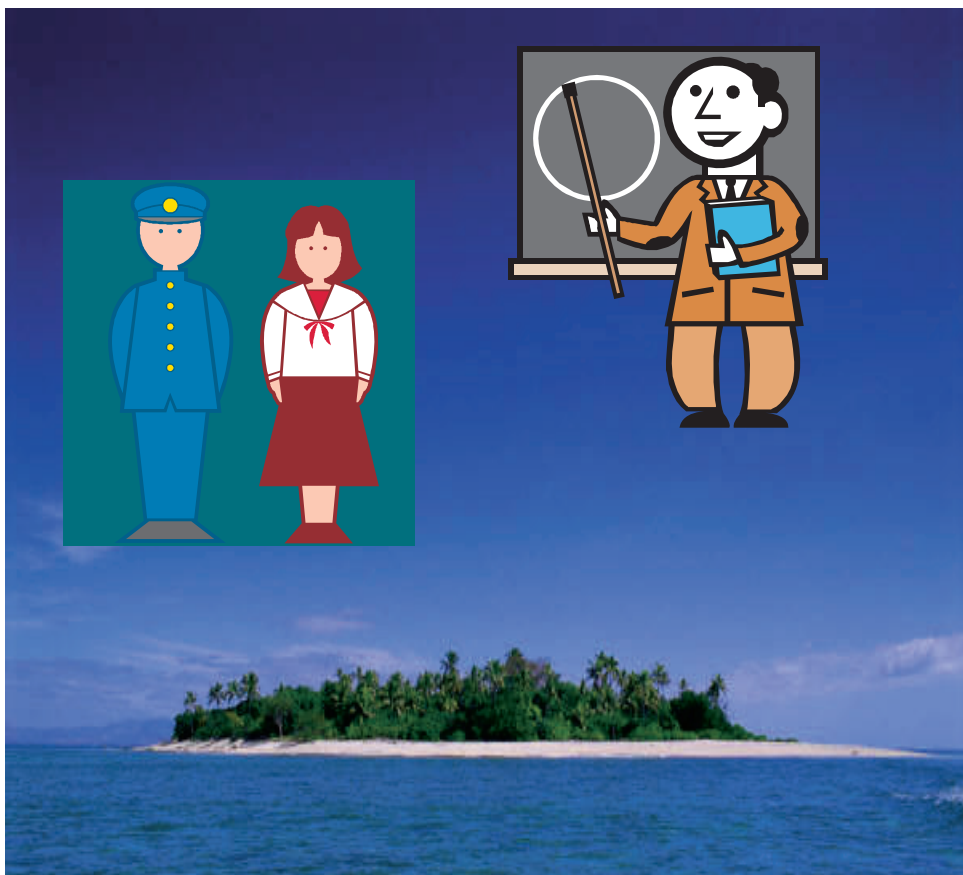
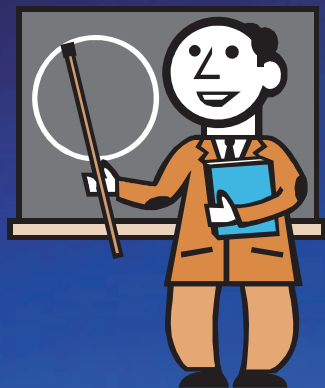


黒服の男

高木 徳一



細い川沿いにある高柴公園では、木々の葉が秋色を日毎に重ね、昨夜来の小糠雨が季節の流れを一段と速めていた。

中央にどつかと座る老桜から葉が落下し、小さな一団が着たカラフルなレインコートにくつつく。そのまま出入り口を抜け、甲高い声を響かせながら北の小学校を目指す。黒い傘を差す学生服姿やセーラー服姿は西へと方向を変えて、葛飾区立紅葉中学校へと急ぐ。木造二階建て校舎は空から見るとコの字形で運動場が東に面している。

一行は南門からアーチ型の玄関に入る。一年生の佐丸照子はそのから運動場を横切り、西校舎の正面玄関ホールに着いた。傘を格子状の箱に差し、黒い長靴を脱いだ。

突然の悲鳴で、照子の福耳が引きつった。

一緒に来た親友の瀬川晴美がすのこの上で腰を抜かしている。晴美の視線の先には、下駄箱から小顔で赤茶目の怖い表情。照子は今開けたばかりの

最上段の下駄箱から上履き用の白い運動靴を取り出し、右側面からフックを浴びせた。

「ウアワワー」との奇声を発する晴美の目を剥いた顔を越して、コンクリート面にホース状の物が落ちた。更なる一撃を顔面に加える。ピクリとも動けなくなつた。

背中には茶色地に鮮明な四本の黒い縦縞。照子は時々沼地で出くわす縞蛇と判断した。

「もう大丈夫よ、晴美。殺してやったから」

「あ、ありがとう。心臓が止まりそうで息が詰まつたわ」「こんな悪戯をするのはきつと彼よ。」

さあ、先生に言い付けてやりましょう」

照子は黒の吊りスカートから花柄のハンカチを手に取り、それで蛇の尻尾を引き上げた。

五段の下駄箱の上にある丸い壁時計の針は八時十分で、横には『皆仲良く、規則を守って 生徒会』と墨書された模造紙が真新しい。

ホールは東南に在り、照子はその角にある職員室

の前のワイングラスを差し上げ、照子のグラスにコチンと当てた。

先生の名譽のため、悠紀子の不安解消のため、大の親友に初めて嘘を付いた照子には、今宵の酒は苦い味となつてしまつた。

九

三十一歳の誕生日が過ぎた頃から、照子はけるさを時々感じるようになった。

舞台に立つても立ちくらみを覚える。過労から来るものだろうと自己診断する。夜は今までより一時間早く床に就くように心掛けた。

春霞が棚引く午後、薄黄のワンピースの裾を風に揺られながら、照子は劇団に顔を出した。

高井清次郎と徳川悠紀子の連名で退団届けが午前中に郵送されてきたと聞き、照子は自分の耳を疑

つた。

今日は四月一日でエイプリルフルだから、誰かの悪戯に決まっていると決め付ける。しかし、夕方になつても、翌日になつても立ち稽古に姿をみせない。

（何で、悠紀子是一言も私に言わないで去つてしまつたの？ 心からの親友だつたのに・・。私の彼を奪つた後ろめたさで、何も言えなかつたの、悠紀子・・）自問自答する照子がそこにいる。

郵送の消印が熱海である事に劇団員の面々は青ざめた。照子の相手役だった高井が照子に惚れて付き合つていた事は公然の秘密だったから。三角関係の清算で熱海を選んだのではないかと・・。

照子もまた悠紀子には、高井が週末には泊まりに来るから、その日を外して遊びに来てと念を押していたのだ。

悠紀子に裏切られた思いに駆られた照子は、過労との相乗作用で神経衰弱に陥つた。悠紀子と競い

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。